特集

紀尾井ホール

新日鉄の音楽メセナ 紀尾井ホール開館15周年

多くの支援者とともに 音楽文化に新たな息吹を送る

1995年4月に開館した紀尾井ホール（東京・千代田区）は、新日鉄創立20周年記念事業の一環として建設され、開館以来今年で15周年を迎えた。この間、多くの音楽ファン、サポート会員、新日鉄グループ企業などの支援のもと、2008年には来場者が200万人を超え、クラシックと邦楽の充実した公演内容に対する評価は年々高まっている。今後も独自の良質な公演を企画し、多くの支援者とともに音楽文化に新たな息吹を送る。

2009年、マリオ・ブルネロ氏と紀尾井シンフォニエッタ東京の公演

2007年、人形浄瑠璃文楽太夫 人間国宝・竹本住大夫氏による『住大夫三夜』

2009年、目にも鮮やかな長唄の公演『近代長唄の響き〈大正期〉』

クラシック

音楽の喜びを分かち合い 新たなシンフォニーを奏でる

紀尾井ホール 15 周年記念
コンサート
「大いなる喜びへの賛歌」
（2010 年 4 月 2 日・3 日）

指揮に高関健氏、ソリストに天羽明恵氏（第 14 回新日鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞受賞者）と田部京子氏（第 4 回同受賞者）を迎え華やかな公演となった

国内有数のレジデント・オーケストラ 紀尾井シンフォニエッタ東京

紀尾井ホールの開館と同時に、レジデント・オーケストラとして紀尾井シンフォニエッタ東京が誕生した。ソリストや室内楽奏者として第一線で活躍している演奏家によって構成され、ホールとオーケストラの潜在能力を最大限に引き出すためホールでリハーサルを行い、音を練り上げていくレジデント・オーケストラならではの音楽づくりに取り組んできた。これまで年間5回の定期演奏会を積み重ね、本拠地である紀尾井ホールの他にも国内各地で積極的に演奏活動を行い、その間2度のヨーロッパ公演も経験。緻密な構築力と豊かな表現力で国内有数のオーケストラに成長した。そして今年、15周年を祝う4月のコンサートでマーラーの交響曲を初演奏し、9月から始まる2010－2011シーズンではベートーヴェン全交響曲ツィクルスに挑むなど、新たな可能性を切り拓く一歩を踏み出している。

ザルツブルク・モーツァルテウム（2000 年 11 月）
初のヨーロッパ公演。ザルツブルク・モーツァルテウムなど名門ホールで成功を収めた。2005年にはドレスデン音楽祭に正式招聘され 4 公演を行った

皇室ご臨席は 66 回にのぼる

紀尾井ホールは天皇、皇后両陛下や皇太子殿下にご臨席いただく機会が多く、これまでに皇室ご来臨は66回にのぼる。最近では2010年5月26日の「ヴィオラスペース2010」に皇太子殿下がご臨席された。自らもヴィオラを演奏される皇太子殿下は、国内外で活躍するヴィオラ奏者の演奏に拍手を送られた。

「ヴィオラスペース 2010」にご臨席された皇太子殿下（2010 年 5 月 26 日）

指揮研究員（齋藤友香理氏、松村秀明氏）と指揮者ラルフ・ゴトーニ氏
（紀尾井シンフォニエッタ東京 第75回定期公演より）

ハルトムート・ヘンヒェン氏との共演
2009年2月13日・14日 ハルトムート・ヘンヒェン氏の指揮でオラトリオの大作『エリア』を上演。メンデルスゾーンの荘厳な世界に挑んだ

極上の室内楽を精選 当代最高のアーティストが登場

紀尾井ホールでは、室内楽専用ホールとしての特徴を最大限に活かしながら、優れたアーティストとともに話題性と質の高さを併せ持つ独自の公演を企画・制作してきた。2007年度に新シリーズとして立ち上げた「紀尾井の室内楽」では、ソロ・リサイタルから楽器アンサンブル、声楽リサイタルまで、あらゆる角度から極上の室内楽を精選。また若い才能の支援と育成に努め、出演者の多くはいまや日本の音楽界で常に話題になる当代最高のアーティストとなっている。

ペーター・レーゼル氏
ドレスデン音楽祭での紀尾井シンフォニエッタ東京との共演が縁となり、2007年に日本で30年ぶりとなるコンサートを紀尾井ホールで開催。再演を望む声に応え、2008年からベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏プロジェクトを行っている

音楽家の育成と裾野拡大に努める

新日鉄は1990年以来20年間にわたり、「新日鉄音楽賞」を通して日本の音楽文化の発展と将来を期待される音楽家の一層の活躍を支援している。フレッシュアーティスト賞の歴代受賞者は、諏訪内晶子氏（ヴァイオリン）、樫本大進氏（ヴァイオリン）、小菅優氏（ピアノ）、下野竜也氏（指揮者）など、皆さん世界で活躍している。

また、紀尾井シンフォニエッタ東京は、プロのオーケストラ奏者を目指す若手演奏家の育成を目的に、毎年1年間を年限として定期演奏会に出演させる期間演奏員をシーズンメンバーとして採用している。さらに2010年度には「指揮研究員制度」を発足させて、指揮者を志す若い音楽家に幅広い経験を積む機会を提供している。地方公演では、地元の中高生を招いて公開リハーサルや特別レッスンを行い、クラシック音楽の裾野拡大に努めている。

新日鉄音楽賞 フレッシュアーティスト賞受賞者

諏訪内晶子氏（第1回、1990年度）

樫本大進氏（第8回、1997年度）

小菅優氏（第13回、2002年度）

下野竜也氏（第17回、2006年度）

クァルテット・エクセルシオ（第19回、2008年度）

邦　楽

至芸を継承し伝統の世界に誘う

女流義太夫の新たな世界
（2008年2月25日・26日）
女流義太夫の人間国宝・竹本駒之助氏（右）と文楽人形の人間国宝・吉田文雀氏（左端）。紀尾井ホールが、女流義太夫と文楽人形の50年ぶりの競演を実現した

邦楽愛好家の裾野を広げる公演ラインナップ

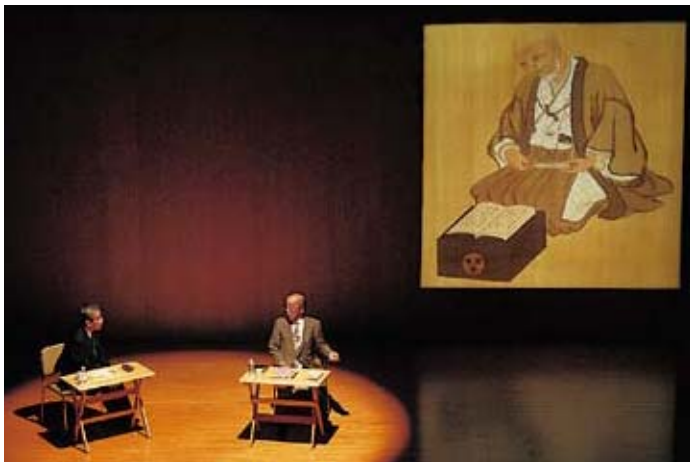
全国でも珍しい邦楽専用の紀尾井小ホールでは、伝統芸能の至芸を公開、保存、継承し、邦楽の世界に多くの人々を誘うことを目的に、さまざまな公演を企画・制作してきた。邦楽は敷居が高いと感じる方々に、邦楽を多面的に理解し、楽しむことができる機会を提供し、邦楽愛好家の拡大を図っている。15周年を迎えた今年も、さまざまな公演を通じて邦楽の活性化に貢献していく。

清治 近松復曲三夜（2009年7月3日・4日）
人間国宝・鶴澤清治氏が近松門左衛門の埋もれた名作を復曲。2009年から年1回、3年のシリーズ。写真は第一夜「用明天王職人鑑」

紀尾井素踊りの会（2007年5月31日）
紀尾井ならではの素踊りのシリーズ。第2回目は歌舞伎・坂東三津五郎氏（写真）と京舞・井上八千代氏の東西名舞踊家が競演した

浪花女一「壺坂霊験記」誕生物語
（2011年3月予定）
溝口健二・依田義賢原作による映画や舞台の名作を義太夫節と朗読劇で見せる。佐久間良子氏が文楽三味線方豊澤団平の妻お千賀役を演じる

山田五十鈴　来舞抄（1999年6月2日）
山田五十鈴氏主演の邦楽ドラマとして、不世出の浮世節女名人立花家橘之助の激動の人生を描いた名作「たぬき」を紀尾井の舞台で再現した



シリーズ 江戸音楽の巨匠たち（2007年9月26日～）
従来のジャンルにとらわれず、江戸音楽に現れた巨匠の人物像や時代背景などを浮き彫りにする演出で邦楽を楽しむシリーズ。写真は渡辺保氏（左）と竹内道敬氏（第1回目「竹本義太夫」）

第20回新日鉄音楽賞 贈呈式・受賞記念コンサート

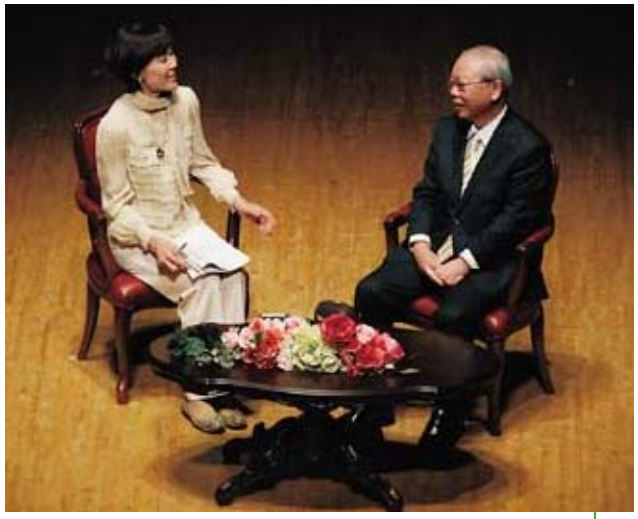
7月9日、紀尾井ホールで「第20回新日鉄音楽賞」の贈呈式と受賞記念コンサートが行われた。フレッシュアーティスト賞にはピアニストの河村尚子氏、特別賞には（財）宮崎県立芸術劇場理事長の青木賢児氏が輝いた。

受賞記念コンサートで演奏する河村尚子氏

類まれな音楽センス　河村尚子（かわむらひさこ）氏

フレッシュアーティスト賞の河村氏は、ドイツ・ハノーファー国立音楽芸術大学在学中に数々のコンクールで優勝・入賞を重ね、2006年には権威ある難関ミュンヘン国際コンクール第2位受賞。翌07年、多くの名ピアニストを輩出しているクララ・ハスキル国際コンクールで優勝を飾り世界の注目を浴び、その後も着実に研鑽を重ね、その資質を大きく伸ばしている。

2009年3月、オール・ショパン・アルバム「夜想（ノットゥルノ）～ショパンの世界」をリリース。同年9月には紀尾井ホールでの初めての本格的なリサイタルを行い、満席の聴衆から喝采を受け大きな話題となった。密度の濃い豊かな表現のうちにも自然な流れを失わないその音楽的センスの良さには類まれなものがあり、今後の一層の飛躍が期待されている。


宮崎国際音楽祭への情熱を語る青木賢児氏

音楽祭の発展に注力　青木賢児（あおきけんじ）氏

特別賞の青木氏は、音楽家ではないにもかかわらず溢れる情熱を音楽へ注ぎ続けた功績が大きく評価された。1957年NHK入社後、報道ドキュメンタリー番組のディレクターを経て、「NHK特集」など大型番組のプロデューサー、報道局次長、放送総局長などを歴任。91～96年NHK交響楽団理事長、その間93年に開館した宮崎県立芸術劇場館長を兼任。周到な計画と実行力によってアイザック・スターン氏を招聘し、96年に「宮崎国際室内楽音楽祭」（現・宮崎国際音楽祭）を創設した。スターン氏没後はシャルル・デュトワ氏など世界的な音楽家の協力を得ながら、音楽祭を大きく育て上げた。

贈呈式では、新日鉄会長の三村明夫（新日鉄文化財団理事長）がトロフィーと賞金を贈呈した。

（河村氏、青木氏は今号の「トークスクエア」にご登場いただいています）